

大正期における「林間学校」の受容と 発展に関する一考察

—その目的と実践内容の分析を中心に—

野口 穂高

はじめに

本論文は、大正期における林間学校や臨海学校（以下「林間学校」と記す）の受容と発展の状況について、主として、その目的と実践内容の分析を通じて明らかにしようとするものである。

大正期は、全国で小学校児童を対象とする林間学校・臨海学校が多数実施されるようになった時期である。大正期の「林間学校」については、従来、主として「身体虚弱児童」を対象とする教育実践として論じられてきた。その理由としては、大正期の「林間学校」の多くが、身体虚弱児童の養護を目的として実践されたことが挙げられる。そもそも、日本における「林間学校」のモデルとなった海外の事例が、虚弱児童向けの教育機関や実践であったし、国内における「林間学校」の多くも、医師や日本赤十字などの医療関係者もしくは医療関係の団体をその担い手としていた。さらに、大正期には虚弱児童対策が社会的な課題として捉えられ、「林間学校」がその有効な対応策として認知されたことも、虚弱児童向けの「林間学校」の発展を後押しした。その後、昭和初期以降には、学校衛生関連の諸施設が拡充されることになり、「林間学校」からは衛生関連の内容が分離され、体験的な学習を主目的とする実践など、現代の林間学校や臨海学校に近い活動もおこなわれるようになっていく。

従来の研究でも、上述のような発展の流れで、日本の「林間学校」の歴史が論じられてきた。大正期の「林間学校」に関する研究としては、管見では山田誠¹、渡辺貴裕²、桐山直人³の研究など⁴がある。山田は、「林間学校」の発展に重要な役割を果たした実践として「本郷区小学校児童夏期休養団」「京都市東山林間学校」など公的实施主体によるものを取り上げ、当時の「林間学校」が健康増進を主目的として実践されていたことを明確にした。渡辺は各種の実施主体による「林間学校」の実施目的と内容を検討し、「衛生的意義」による「林間学校」に、「教育的意義」が付与された過程とその要因を明らかにした。渡辺によれば、当初は身体虚弱児童に限定されていた「林間学校」の対象者が都市中間層の児童へと拡大され、彼らの教育要求を充たすために「教育的意義」が

重視されるようになるなど、大正中期から末期にかけて、「林間学校」その教育目的や内容に変化があったとされる。また、桐山は、白十次会が虚弱児童向けに設立した「白十字茅ヶ崎林間学校」の実態を詳細に検討し、同校が養護学校へと発展する過程とその教育的意義を明らかにしている。虚弱児童の養護を目指して実践された大正期の「林間学校」は、昭和期においては、より医療的な活動を充実させ効果をあげるため、専門的教育施設へと発展するのであった。

しかし、これまでの筆者の調査において、「林間学校」の受容と発展の時期である明治末期から大正中期にかけても、対象を虚弱児童に限定しない事例や虚弱児童の養護を目的としない事例が少なからず存在していることが確認できた。また、欧米の「林間学校」を模しながらも、その目的において、体験を通じた理科や歴史・地理の学習などを掲げ、健康増進以外を企図する実践も展開されていたり、中心的な活動は虚弱児童の養護や健康増進であっても、地元の史跡や寺社の実地学習、商工業施設の見学など、各地域の地域性を生かした活動も見られたりした。このような虚弱児童の養護以外の教育的意義に着目しながら「林間学校」の受容と発展がなされたことは、各地の実践者らが、単なる欧米の「林間学校」の模倣に留まらず、地域性や各学校の特色を一定程度反映した独自の活動を展開するための基盤になったと考えられる。そこで、本論文では、大正期の「林間学校」を対象に、その受容や発展の過程を明らかにするとともに、目的や内容を分析し、各地域でどのような「林間学校」が実践されたのか、「林間学校」の普及状況を明らかにしたい。

なお、筆者は、大正期から昭和初期に隆盛した「林間学校」の実態や特質、意義を究明する研究を構想しているが、以上の分析を通じて、大正期の「林間学校」の普及状況を俯瞰的に捉えることで、大正期以降の「林間学校」の受容と発展の歴史について、その一端を明確にすることができる。また、大正期の「林間学校」の受容と発展の過程を明らかにすることは、今後の研究において、個別実践の特質を比較的に捉え、大正期の「林間学校」実践史における位置づけや意義づけを究明するうえでも、また昭和初期の「林間学校」との連続性や非連続性を明確にするうえでも不可欠の課題といえる。

1, 明治末期から大正期における海外の「林間学校」の受容

はじめに、大正期の「林間学校」について、実施期間及び形態に基づく類型を明示する。当時の「林間学校」という呼称は、現代の宿泊を伴う学習形態の実践のみを指すわけではなく、実施の形態や期間によって多様な名称が付けられていた。大正期に実践された「林間学校」としては、「常設林間学校」「全聚落」「半聚落」の3種に分類できる⁵。

まず、「常設林間学校 (Waldschule)」とは、高原や海浜など、自然環境の中に実際に校舎を建設し、教育をおこなうものである。主として身体虚弱児童を対象とし、1ヶ月～1年以上等、長期の滞在を必要とすることも多かった。次に「全聚落 (Vollkolonie)」や「休暇聚落 (Ferienkolonie)」、 「休日殖民 (Vacation-coloney)」は、夏期休暇等を実施された宿泊学習型の野外での教育実践のことである。キャンプ場や旅館などの宿泊施設、寺社、地方の学校の校舎、テントなどを利用し、実

施場所は、近隣の山地・高原・海浜などであった。期間としては主として2～3週間から1か月程度にわたる。この「全聚落」が現代の林間学校に最も近いといえる。最後の「半聚落 (Halbkolonie)」は、通学式の「林間学校」のことであり、宿泊は伴わず、自宅から電車や徒歩で開催地に通学した。実施場所は、校庭の一角や郊外の森林・河川等が多く、期間は2～3週間程度である。多くの場合、早朝に子どもを集め、夕方になると帰宅させていた。このように、「林間学校」の普及期においては、多様な実施場所や実施形態により活動がおこなわれていた。後述するように、この場所や形態における多様性は、「林間学校」の目的を虚弱児童の養護に限定せず、郷土の歴史や地域の産業の学習、教科の学習や体験的な学習など、様々な目的や内容により実践が展開される基盤になったといえる。

次に、大正期における「林間学校」について、先行する海外の実践との関係を確認する。大正期には、身体虚弱児童の増加が教育上の大きな問題となり、これらの児童の保護救済のため、ドイツを中心とした欧米各国における「林間学校」が、文部省や学校医など学校衛生の関係者らによって紹介され、その必要性が提唱された⁶。このため、大正期の「林間学校」の多数、とりわけ大正中期から末期にかけての実践は、欧米の「林間学校」をモデルとし、健康増進を主目的として展開されることになったのである。それでは、大正期の日本において、海外のどのような実践が紹介されていたのだろうか。

杉浦守邦によれば、海外の「林間学校」が日本で初めて紹介されたのは、明治20年代のことであり、1888年にベルリンに留学していた宮城医学校の瀬川昌耆が、ドイツの学校衛生について報告するなかで「フェリエンコロニー」について触れているという⁷。その後、瀬川は1893年の『学校衛生法綱要』において、夏期休暇などの休暇中に児童を保護する必要性を説き、「虚弱なる児童にして貧困なる者」を保養させる「休暇聚落」が欧米にあることを紹介している⁸。また、1899年には医師の坪井次郎が欧州の「休暇団体」として「林間学校」を伝え⁹、1908年には、小児科医小原頼之が著書『育児日記』において欧州のフェリエンコロニーを紹介し、その実施の必要性を提唱した¹⁰。さらに、1910年には文部省の学校衛生事項取調嘱託の駿河尚庸が、その著書で欧米の「林間学校」について内容を記している¹¹。その他、1913年には教育学者の吉田熊次が、ドイツのヴァルトシュレーレやミルヒクール¹²、フェリエンコロニーなどを紹介しながら、「林間学校」の発展の歴史をまとめ、その実践例を詳細に述べている¹³。1918年には、文部省普通学務局により『夏季休暇中ノ体育的施設ニ関スル意見』がまとめられ、「欧米諸国ニテハ既ニコノ休暇中特ニ体育ニ力ヲ用ヒ著々其効果ヲ挙ゲツアル」と述べ、「海浜聚落」「林間聚落」「山間聚落」などの実施方法を示した¹⁴。また、1910年代から20年代初頭にかけては、医師をはじめとする学校衛生の関係者らにより、欧米の「林間学校」の概要や実施方法を解説した書籍が複数出版されるなど、とりわけ大正期において多数の実践が紹介されるようになったことが分かる¹⁵。以下、これらの書籍をもとに、大正期の日本において、欧米における「林間学校」の発展の様相及びその目的と実践内容がいかに紹介されていたのか、その内実を明らかにする。

大正期に欧米の「林間学校」として紹介された実践は、ドイツのヴァルトシュレー、フェリエンコロニー、イギリスやアメリカのオープンエアスクールなど様々な国のものであった。これらの活動は、自然環境を利用して、子どもの健康増進を目指す実践である点は共通しており、主に実施する場所や方法により異なる名称が付されている。この時期に、特に多く紹介されているのが、ドイツのヴァルトシュレー¹⁶とフェリエンコロニーであった。ヴァルトシュレーはドイツ語で森の学校の意で、森林の中に実際に校舎を建築し、長期間にわたり児童の教育を行うものである。日本ではその意味から「林間学校」と翻訳された。一方、フェリエンコロニーは「休暇聚落」と和訳されており、夏期休暇などの長期の休暇を利用し、一定期間自然環境下で教育を行うものであった。このヴァルトシュレーとフェリエンコロニーの海外での発展について、大正期の日本でどのように伝えられたのだろうか。

医師の小田俊三が記した『野外学校の学理と実際』によれば、ヴァルトシュレーやフェリエンコロニーの起源は、18世紀半ばに結核の予防・治療のために設置された海浜療養所まで遡るという。すなわち、1797年にジョン・コークレー・レットソムらにより「マルゲート海浜病院」¹⁷が創設され、結核治療に一定の成果を示すと、海浜病院を模した病院が欧州各地に多数創設されるようになった¹⁸。そして、19世紀中頃より、これらの病院の影響を受ける形で、結核予防のための子ども向けのヴァルトシュレーの設置やフェリエンコロニーの実施が進むことになる。早い時期のものとしては、1850年にロシアの「セントペテルスブルク及バルチック沿海州に「フェリエンコロニー」が出来た」という¹⁹。その後、1853年にはデンマークのコペンハーゲンにおいて、数名の虚弱児童を田舎の家庭で保養する試みがおこなわれた²⁰。この実践は次第に拡大し、1857年には700名の児童が参加し、1906年の時点では約17,000名以上にまで参加者が増加しており、この人数はコペンハーゲンの全児童の約4割にあたるという²¹。そして、増加した児童に対応するため、ホームステイ形式ではなく、後の「林間学校」のように海浜に家屋を建設し、宿泊することになったのであった。

また、1876年には、スイスの牧師ワルター・ピオンが、チューリッヒ市の児童68名を夏期休暇の間アッペンツェルの山間に静養させ大きな成果をあげ、その効果が世に認められるようになった²²。同じく1876年には、ドイツのハンブルク²³、1878年にはフランクフルトでもフェリエンコロニーがおこなわれ、ドイツ全土で同様の試みが展開されていく²⁴。その後、1881年には、ドイツ及びスイスにおける「休暇転地奨励会」の会議がベルリンで開催されるとともに、プレーメンにて関係者が会合を開き、「ドイツ夏期休養連合会本部」と「ベルリン家庭衛生養護会本部」が組織されるなど、ドイツ国内におけるフェリエンコロニー実施のための組織が整えられていった²⁵。

さらに、1888年には、スイスのチューリッヒで「夏期殖民万国会議」が開催され、欧米諸国の至る所でフェリエンコロニーが発達するようになったという²⁶。たとえば、ドイツでは関連する協会が80団体以上に達し、1907年には約36,000名が参加した。フランスの場合、1905年のパリ市による実践に約6,400名が参加したほか、私設による実践が21箇所で開催され約7,000名が参加し

ている。また、フランスの地方都市でも 22 箇所まで公的な実施があり、約 3,500 名が参加、私設の 74 箇所の実践に約 7,400 名が参加している。スイスでも、その実施数は 100 箇所を数えた。その他、アメリカでは、夏期に数か月間、テントを利用した仮小屋を設け、母子ともに 8 日間にわたり共同生活をする試みをおこなっているという。最大のものはシカゴにある「ガーツヒル露宿」であり、1905 年には 1,558 名が参加したのであった。

同時期には、上記のようなフェリエンコロニーの発達を背景に、常設型のヴァルトシュレーレの設置も進んでいく。1881 年には、ベルリン大学の小児科教授アドルフ・バギンスキーがベルリン市にヴァルトシュレーレの開設を建議したが、これは市による認可がおりなかったという²⁷。その後、1904 年にはベルリン郊外のシャルロッテンブルクに、初めて常設型のヴァルトシュレーレが建設された²⁸。また、1907 年にはフランスにも同様の施設が建設され、その後スイス、オーストリアでも設置が進んだ²⁹。さらに、同じく 1907 年には、イギリスのウールウィッチ市の王室建築協会がボルトン森林に隣接した敷地をオープンエアスクールの用地としてロンドン市に提供し、翌 1908 年には常設型の「林間学校」として 3 校のオープンエアスクールが創設されている³⁰。また、同時期には、多数の虚弱児童に対応するため、費用の高いオープンエアスクールの代替措置として、イギリス国内では「露天学校」が発達したという。露天学校とは、夏の期間のみ小学校内の運動場を利用して、オープンエアスクールと同様の教育をおこなうものであった³¹。また、1912 年には、ハリファックスに「外気学校」が設置されたり、ブラッドフォード、シェフィールド、バーミンガム、マンチェスター、リヴァプールなど、各州に 1 校の野外学校が建設されたりするなど「二三年の間に大都市の教育制度上重要な位置を占むに至った」という³²。

このイギリスでの試みは、アメリカへと伝わり、1908 年 1 月にロードアイランド州のプロビデンス市の学校で、結核初期の児童を対象にオープンエアスクールが実施されたり、同年 7 月にはボストン市が公園内の食堂を利用して実施したりもした。さらに同年 12 月には、病院船として使用していた川船を使いオープンエアスクールが開設され、これらを皮切りに、米国内でも「林間学校」が発達していく。1912 年の段階では、44 か所に開設されていたが、米国は森林が少ないため、テントなどを利用した露天学校が中心であり、その他学校や病院の屋上などを利用するものもあった³³。また、アメリカにおいては虚弱児童のみではなく、健康な児童の教育としてもおこなわれた点が特徴的である。

以上が、大正期の「林間学校」に関する書籍で紹介されていた、欧米における「常設林間学校（ヴァルトシュレーレ）」及び「休暇聚落（フェリエンコロニー）」の歴史と実施状況であった。これらの書籍においては、次の 2 点においてその内容が共通している。第 1 に、「林間学校」は、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス、イギリス、アメリカなど、多数の国と地域で実践されるなど、いわば国際的な流行を見せており、大きな成果を挙げていること。第 2 に、結核予防の海浜療養所を起源とすることからも分かるように、その目的が身体虚弱児童の養護や健康増進にあることである。このため、虚弱児童が増加していたとされる大正期の日本において、「林間学校」は、上

述のような国際的な教育の動向から考えても、その実施が必要不可欠な実践として位置付けられ、積極的に実施が試みられるとともに、身体虚弱児童の養護と健康増進を主目的として実践されることになったのである。

また、紹介されている海外の事例をみれば、常設型のものもあれば、夏期休暇など長期の休業を利用したものなど、実施形態は様々であった。その期間も、1年以上にわたるものから、2～3週間程度のもの、また、宿泊を伴うものから通学式のものなど、多様な実践が展開されていた。さらに実施する場所も多様であった。たとえば、小田俊三は、国内や海外で実施されている「林間学校」について、その実施場所から類型化し、表1のように8種に分けて紹介している³⁴。表1から分かるように、利用する宿舎についても、自然環境下に実際に校舎を建設する実践もあれば、宿泊施設を使用したり、テントを利用したり、民家を利用したりなど、一定ではなかった。さらに、実施する場所も、山間部、森林、海浜、河川、島嶼、海上、都市内の公園、校地の一角や校舎の屋上など多岐にわたっている。

表1. 海外における「林間学校」の種別とその特質

番号	名称	紹介されている特徴及び効能
1	高山学校	高山の上で開設するもの。実施が難しいが、高山気候の効果により、食欲増進、貧血、栄養不良、腺病質の治療などに高い有用性を示す。
2	林間学校、林間聚落	平地又は丘岡の森林中で開設するもの。高山学校に準じる効果がある。実施しやすいので、海外においても国内においても実施数が多い。
3	臨海学校、臨海聚落	海浜で開設するもの。海外では、海浜療養所との関係から歴史も古く、研究が進んでいる。海水を含んだ清らかな空気が健康増進に効果があり、オゾンの豊富さや日光の反射光線の強さも相まって身体を強健にする。
4	島嶼で開設せられるもの	島嶼に開設するもの。臨海学校と海上で開設するものとの中間に位置する。海洋気候の効果により身体を健康にさせるほか、気象学の知識を養ったり、魚介、海藻など海産動植物の学習にも適している。国内では食糧・飲料水の供給が難しい。
5	海上で開設せられるもの	汽船などを利用し、航海をおこなうもの。航海により常に周辺環境の変化があり、児童の気質に適する。海洋気候の効果により身体を健康にさせるほか、国民に必須の海事思想を養うのに適している。また、海洋、船舶、気象に関する知識を得たり、忍耐力を養うことができる。
6	屋上で開設せられるもの (屋上外気学校)	都市内で「林間学校」の効果をを得るために、校舎の屋上、渡し船、公園の一角に児童を集めて教育をおこなう。簡易に実践でき、多数の児童を参加させることができる。
7	移動的野外学校	一定の期日、諸所の森林原野海浜等を転々と旅行するもの。児童の活動性を高め、精神の活動も活発になり、身体も強健になる。児童の知識欲を刺激するとともに、歴史地理博物などの体験教授が可能になる。旅行の不便と困難により、克己心、忍耐力、友情、共同心などを育む。日本の修学旅行とは性格が異なる。修学旅行を移動的野外学校とすべき。
8	閉鎖聚落	地方の家などを借りて、一定期間実施される。教員と児童を一同として、共同生活を送ることにより健康増進をはかる。デンマークのコペンハーゲン市がおこなったものやスイスのワルター・ピオンによる実践が著名。

注：小田俊三『野外学校の学理と実際』（弘道館、1922年）を参考に作成

このように、大正期には、期間や実施形態が様々な「林間学校」の事例及び実践方法が紹介されていた。そして、これら多様な実例をモデルとしながら、国内における「林間学校」が実践されることになったのである。このことが大正期から昭和初期の「林間学校」にどのような意味をもたらすのかについては、第3節で述べる。次節では、明治末期から大正期の中頃にかけての国内における「林間学校」について、その普及状況を明らかにする。

2, 大正期における全国各地の「林間学校」とその発展

本節では、国内における「林間学校」の受容と発展について、その数量、目的や実践内容の変遷から考察する。

先ず、大正初期の日本国内における「林間学校」実践の歴史について、その概要を確認する。初期の実践として著名なものとしては、1907年に、東京九段下の精華学校長の寺田勇吉と医師の小原頼之らが、ドイツのフェリエンコロニーを参考として「転地修養会」を実施したものが挙げられる。同校では、1907年の冬と翌1908年の夏、1909年の夏の計3回、健康増進を主目的とする実践をおこなっている。この精華学校の実践は、必ずしも虚弱児童を対象としていないこと、夏期休暇中ではなく冬期休暇中に実施したという点において特色的である。また、小原による「林間学校」の重要性を提唱する記事や「転地修養会」の見学記や報告会に関する記事が、東京朝日新聞にたびたび掲載されるなど、社会的にも一定の注目を集めていたと考えられる³⁵。また、1907年の夏には、東京市下谷区小学校が下谷保養会の名称で鎌倉において「夏季聚落」を実施している³⁶。その他、1911年8月には、本郷区が「野外学校」を開催³⁷、香川県でも1912年の夏に高松市四番丁尋常小学校が「休暇集落」を開催したり、高松市の小学校が連合して「夏季児童保養所」が開催³⁸されるなど、数は少ないながらも明治末期から「林間学校」が実践されていたのであった。

次に、国内における普及状況について、数量及びその目的や実践内容から考察する。大正期の「林間学校」に関する調査報告としては、文部省が実施した『大正七、八、九三箇年に於ける全国夏季体育的施設』³⁹（以下、報告書と表記する）、『夏季に於ける体育的施設の状況調査』⁴⁰がある。ここでは、報告書をもとに1918年から1920年までの「林間学校」の実施数及び学校段階別の実施数を確認する。これらの実施数を表にすると、表2と表3のようになる。また、『夏季に於ける体育的施設の状況調査』に記載の1918年から1923年までの「林間学校」の実施箇所数をまとめると、表4のようになる⁴¹。

表2に示したように、総計では、1918年に136箇所、1919年に198箇所、1920年に205箇所「林間学校」が実践されていた。種別で見ると、「常設型林間学校」は1カ所と少なく、多数を占めているのは「臨海聚落」と通学式の「林間半聚落」である。表3に示したように、この内、「林間半聚落」については小学校のみの実施となっており、「臨海聚落」については、中学校や女学校での実施が多い。小学校においては、比較的簡易に実施が可能な、「林間半聚落」を中心として普及が進んでいたといえる。

表 2, 全国における「林間学校」の種別ごとの実施数

種別	実施年		
	1918 年	1919 年	1920 年
林 間 学 校	1	0	0
林 間 聚 落	9	22	31
林間半聚落	37	52	82
臨 海 聚 落	71	102	74
臨海半聚落	18	22	18
合 計	136	198	205

注：文部省大臣官房学校衛生課『大正七，八，九三箇年に於ける全国夏季体育的施設』（1922 年）をもとに作成

表 3, 学校段階別の「林間学校」の実施数

種別	学校段階	実施年		
		1918 年	1919 年	1920 年
林 間 学 校	尋常及び高等小学校	1	0	0
	中等学校	0	0	0
	女子中等学校	0	0	0
林 間 聚 落	尋常及び高等小学校	6	21	28
	中等学校	3	1	1
	女子中等学校	0	0	2
林間半聚落	尋常及び高等小学校	37	52	82
	中等学校	0	0	0
	女子中等学校	0	0	0
臨 海 聚 落	尋常及び高等小学校	30	47	43
	中等学校	36	51	29
	女子中等学校	5	4	2
臨海半聚落	尋常及び高等小学校	16	22	16
	中等学校	2	0	2
	女子中等学校	0	0	

注：文部省大臣官房学校衛生課『大正七，八，九三箇年に於ける全国夏季体育的施設』（1922 年）をもとに作成

また、表 4 をみると、「林間学校」の実施数が年を追うごとに増加し、拡大を遂げたことが分かる。特に、1920 年から 1921 年の間には 221 箇所から 489 箇所と 2 倍以上の伸びを示している。その理由としては、1921 年 3 月の第 44 回帝国議会衆議院において、全国で林間学校の実施数を増やすことを目的とする「林間学校奨励補助ニ関スル建議案」が可決されており、このことが大きな影響を

表 4. 全国における「林間学校」の実施箇所数

年	林間聚落	臨海聚落	その他	合計
1918	47	87	42	176
1919	74	124	13	211
1920	113	92	16	221
1921	161	159	169	489
1922	286	296	299	881
1923	402	538	444	1384

注 1:『夏期に於ける体育的施設の状況調査』(1926)をもとに作成

注 2:その他の内容は温泉聚落・高原聚落・湖畔聚落

表 5. 「林間学校」の実施数が多い地域と特徴

種別	府県名	特 徴
林 間	大 阪 府	林間聚落が最も多い
	愛 媛 県	林間半聚落が比較的多い
	熊 本 県	林間聚落, 半林間聚落が多い
臨 海	京 都 府	臨海聚落と臨海半聚落を盛んに実施。内容も見るべきものが多い
	山 形 県	臨海聚落を盛んに実施している
	愛 知 県	総数はあまり多くない。海を利用したものが特徴。
	静 岡 県	同上
	三 重 県	臨海聚落を多数実施している
	鳥 取 県	臨海聚落が盛んに実施されている
	香 川 県	臨海聚落が盛ん
総 合	新 潟 県	夏期聚落を多数実践している, ただし女子向けのものが皆無である
	兵 庫 県	各種の聚落を実施している。「数の多きこと全国第一にして特筆に値す」
	徳 島 県	各種の聚落が多い
その他	東 京 府	代表的なものが2, 3あるのみで大都市としては少ない状況
	神奈川県	総数は少ないが, 海上旅行, 天幕旅行など特徴的な実践がある

注:文部省大臣官房学校衛生課『大正七, 八, 九三箇年に於ける全国夏季体育的施設』(1922年)をもとに作成

もたらしたことが挙げられる⁴²⁾。

「林間学校」の普及状況において地域的な特徴はどのようになっているのだろうか。報告書に挙げられた, 「林間学校」が盛んな地域とその特色をまとめると表5のようになる。また, 1921年から1923年までの3種の実施箇所数について, 箇所数の多い道府県を表にすると表6のようになる。

表5及び表6からは, 国内においては, 兵庫, 大阪, 京都など, 近畿地方を中心に, 西日本で実

表 6. 活動別実施数の多い道府県

順位	林間聚落	海濱聚落	その他
1	大 阪 (83)	広 島 (94)	静 岡 (66)
2	兵 庫 (69)	静 岡 (72)	兵 庫 (62)
3	岡 山 (67)	富 山 (64)	広 島 (49)
4	広 島 (59)	大 阪 (63)	岐 阜 (48)
5	東 京 (45)	長 崎 (55)	大 阪 (47)
6	佐 賀 (41)	京 都 (53)	福 岡 (47)
7	京 都 (34)	愛 知 (52)	岡 山 (35)
8	滋 賀 (34)	岡 山 (50)	福 井 (33)
9	北海道 (32)	兵 庫 (45)	京 都 (31)
10	奈 良 (32)	東 京 (44)	長 崎 (29)

注 1:『夏季に於ける体育的施設の状況調査』(1926)をもとに作成

注 2:カッコ内の数字は実施数

注 3:その他の内容は温泉聚落・高原聚落・湖畔聚落

施箇所数の多いことが分かる。同時期の「林間学校」に関する書籍においても、その実施は西日本とりわけ関西圏が早いとされており、代表的な実践として大阪、京都、香川の事例が挙げられている。たとえば、『林間学校』の著者である岡田道一は、初期の著名な実践として、大阪府の濱寺海岸の「常設式林間学校」や汎愛尋常小学校の「林間学校」、京都府の「東山林間学校」、宮城県の片平町小学校の「林間学校」、香川県高松市の「夏季児童保養所」などを挙げている⁴³。岡田は、1920年から実施された東京市麹町区の「調布玉川(多摩川)夏期林間学校」の中心人物であったが、実施に先立ち京阪地方の「林間学校」を視察し、その目的や内容、実施方法などを研究したという⁴⁴。このことから、明治末期から大正期の中頃までの「林間学校」は西日本を中心に実施され、全国に広まったと考えられる。

その理由としては、大正期の「林間学校」は、都市の生活・教育環境に対する批判意識から実践されることが多かったことが挙げられる。多くの「林間学校」は、虚弱児童が増加した原因を都市の生活・教育環境の劣悪さに見出し、都市から児童を退避させ、自然環境下で健康増進を図ろうとする人々により実践された。このような考え方は、都市計画家による都市計画の進展や、それに伴う郊外住宅地の開発などとも軌を一にしている。周知のように、西日本とりわけ近畿地方では、都市計画や郊外住宅地の開発が全国に先駆けて展開されており、これらを背景に「林間学校」の実施が進んだと考えられる⁴⁵。一方、少ない道府県としては、北海道、青森、秋田、岩手、福島、埼玉、群馬、茨城、栃木、山梨、高知、島根、山口、宮崎、鹿児島、沖縄など、東北、関東北部、九州南部など、比較的自然的豊かな地域や大都市の少ない地域が挙げられている⁴⁶。

その他、先の『夏季に於ける体育的施設の状況調査』では、「林間学校」の他に、学科の復習を

主眼とする「夏季学校」が実施されていることも報告されている。この夏季学校は、1918年には42箇所、1919年には13箇所、1920年には16箇所と「著しく其数を減ぜり」という。その理由として、同書では「体育を加味せりとは云え」「体育上の価値少なく其の減少は寧ろ当然なりと云うべし」と指摘している⁴⁷。これらの夏季学校の多くは、この時期に健康増進を目的とする「林間学校」へと再編が進んだと考えられる。同書では、夏季学校において体育的な活動が少ないことを批判しているが、このような学習を主目的とする実践が「林間学校」に先んじて実施されていたことは、学習活動を基盤に体育的要素を加味した「林間学校」を実践することにつながったといえる⁴⁸。

次に、大正期の「林間学校」について、その目的と実践内容から考察する。先の報告書や大正期の「林間学校」に関する書籍に紹介されている著名な実践を表にすると、次頁の表7のようになる。

表7に示した実践のうち、1番から12番までは虚弱児童の健康増進を主目的とする実践である。一方、13番から23番までは、①健康な児童をより強健にするための実践や、②健康増進以外の目的を主とした実践、③虚弱児童の養護を主目的としつつも、学習面で特徴的な活動をしている実践である。このように、明治末期から大正期においても、独自の教育目的や内容による「林間学校」が一定程度実践されていた。たとえば、13番の栃木県女子師範学校附属小学校の「林間学校」では、動植物の観察や採集を中心とする自然体験活動を実施していた。また、23番の鳥取県啓成尋常小学校では、児童に地元の地理や歴史の研究をおこなわせたり、郷土の地理・歴史に関する講話を実施したりしている。その他、開催地の海岸で海藻魚介の採集と標本の作製をおこなったり、地域の産業などを見学したりもした。さらに、徳島県の第二里浦小学校で行った「林間学校」は、「自然科」を設置し、自然観察や郷土の学習を実施している。この第二里浦小学校の「林間学校」については、「知力の救済を主としたもの」であり、「学力体力共に稍顕著な成績を示し、農村的林間学校、補助教授を主とせる林間学校として、大小の刺激を教育界に与えた」と評されている⁴⁹。

このように、明治末期から大正期にかけての「林間学校」においても、1921年以降に急激に増加する虚弱児童の養護・教育を主目的とする「林間学校」と同様の目的・内容のものが多数を占めていた。一方で、数は少ないながらも、独自の教育目的や健康増進以外の目的、内容を含む「林間学校」も実践されていたことが分かる。

また、この時期には、実践の方法に配慮を要する事例が多数あることが、報告書で指摘されている。たとえば、半聚落において午前5時に開始し午後7時まで行うものや、午前6時開始、午後8時終了のもの、通学時間が片道4時間を要するものなどがあり、「児童に懈怠の念を起こさし」め、「睡眠の不足を招来する」と批判されている。その他、プログラムを詰め込み過ぎ、休憩時間や昼寝の時間を十分に設けずにおこなうものもあり「午睡は前平日活動せる児童の疲労を恢復して後半日を更に快活に暮らさしむるに足るべき必要有益なる方法」であり「約一時間の午睡は寧ろ強制的に励行せしむるを有利とす」と、その改善を求めている。さらに、「林間学校」によっては「参加児童体格甲なるものに限りたるものあり」と指摘し、可能な限り「虚弱児童の養護を先ず第一に行

表 7. 大正期における各地の主要な「林間学校」実践

番号	名称	主催者	指導者	実施年月	期間	実施場所	形態	参加資格
1	仙台市林間教養所	仙台市片平小学校	不明	1917 年 8 月	4 週間	仙台市外の高原	半聚落	虚弱児童
5	林間教育	名古屋市古新小学校	不明	1917 年 8 月	4 週間	六所神社内の森林	半聚落	健康児及び虚弱児童
2	夏期早朝海浜聚落	宮城県志津川尋常高等小学校	教員 11 名, 校医 1 名	1920 年 8 月	3 週間	志津川町松原公園	半聚落	虚弱児童, 精神薄弱
3	調布多摩川夏期林間学校	東京府麴町区	不明	1920 年 8 月	3 週間	調布町玉翠園	半聚落	虚弱児童
4	瀧の川夏期林間学校	東京市林町尋常小学校	教員 3 名, 学校医	1920 年 8 月	3 週間	瀧の川町瀧の川園	半聚落	虚弱児童, 学業不振
5	林間教育	名古屋市古新小学校	不明	1917 年 8 月	4 週間	六所神社内の森林	半聚落	健康児及び虚弱児童
6	暑中緑陰学校	三重県阿山郡頼田村教育会	教員 4 名	1920 年 8 月	3 週間	頼田神社	半聚落	精神薄弱, 身体虚弱
7	下鴨林間学校	京都市教育会婦人部	教員 16 名, 校医 2 名, 看護婦 1 名	1920 年 8 月	3 週間	下鴨神社境内	半聚落	虚弱児童
8	汎愛夏期学園	大阪府汎愛尋常小学校	不明	1909 年 8 月	2 週間	淡輪村黒崎ノ浜	全聚落	不明
9	夏季林間学校	神戸市真野尋常小学校	校長 1 名, 教員 4 名	1920 年 8 月	3 週間	高取山 (三菱倶楽部)	半聚落	不明
10	高松林間学校	高松市内小学校連合	幹事 (校長より 3 名), 教員 4 名, 校医 1 名	1920 年 8 月	4 週間	栗林公園	半聚落	虚弱児童
11	林間教育所	丸亀市	校長 3 名, 教員 13 名, 学務委員 4 名, 校医 4 名	1920 年 8 月	2 週間	亀山公園	半聚落	虚弱児童
12	林間教育団	熊本市教育支会	園長 1 名, 教員 8 名, 医師 1 名	1920 年 8 月	2 週間	人吉町相良城址	全聚落	健康児, 虚弱児童
13	林間教育	栃木県女子師範附属小学校	不明	1917 年 7 月	3 週間	八幡山雷神社付近の森林	半聚落	虚弱児童, 学業不振
14	赤坂臨海教育団	赤坂臨海教育団 (青山尋常小学校)	教員 4 名ほか	1917 年 7 月～8 月	3 週間	千葉県浜金谷町	全聚落	規定なし
15	高原林間学校	東京女高師附属小学校	教員 7 名, 医師 3 名	1921 年 7 月	10 日間	長野県軽井沢町	全聚落	不明 (尋 4 以上)
16	林間臨海教育会	静岡県沼津尋常高等小学校	教員 26 名, 医師 1 名, 水泳教師 1 名	1920 年 7 月～9 月	7 週間	沼津町千本浜海岸	半聚落	3 年生以上男子全員
17	児童避暑保養所	日本赤十字社三重支部	主管 1 名, 教員 6 名, 医師 1 名, 事務 1 名ほか	1920 年 8 月	3 週間	二見浦尋常小学校	全聚落	虚弱児童, 病弱児童
18	夏季保護団第一団	石川県金沢市馬場尋常小学校	教師 8 名, 医師 1 名	1920 年 8 月	10 日間	卯辰山	全聚落	不明 (尋常 3 年以上)
	夏季保護団第二団			1920 年 8 月	10 日間		半聚落	虚弱児童, 精神薄弱
	夏季保護団第三団			1920 年 8 月	4 週間	馬場尋常小学校	半聚落	不明 (第 6 学年)
19	海上学校	京都市教育会	教員 6 名, 医師 2 名ほか	1916 年 8 月	1 週間	瀬戸内海, 香川県高松市, 大分県別府市	全聚落	規定なし (5 年生以上)
20	夏季児童保養所	日本赤十字社京都支部	主管 1 名, 教員 8 名, 医師 2 名, 看護婦 3 名ほか	1920 年 8 月	3 週間	京都府府中村阿蘇尋常小学校	全聚落	虚弱児童
21	木津川水辺学校	奈良市教育会	教員 18 名, 水泳教師 3 名, 医師 1 名ほか	1920 年 8 月	5 日間	京都府木津川海岸	全聚落	健康児
22	新瓦町小学校	高松市新瓦町小学校	教員 5 名程度, 校医 1 名	1911 年 8 月	4 日間	牟礼村	全聚落	不明 (5・6 年生)
23	徳島県里浦林間学校	第二里浦小学校	不明	1917 年 8 月	3 週間	広戸海岸	半聚落	不明 (尋 4 以上)
24	啓成臨海学校	鳥取県啓成尋常小学校	教員 3 名	1920 年 8 月	10 日間	淀江町海岸	半聚落	健康児

注. 文部大臣官房学校衛生課『大正七、八、九、三箇年に於ける全国夏季体育的施設』1922 年, 鶴飼盈治『日本アルプスと林間学校』同文館, 1923 年をもとに作成。

人数	主な目的	主な活動	備考
55名	健康増進	体操、遊戯、学科の復習、温浴	—
不明	健康増進	体操、水浴、神社参拝、自然体験、写生、学習	健康児童の心身の鍛練、虚弱児童の体質改善
58名	健康増進	冷水摩擦、日光浴、深呼吸、運動、自由遊戯、体操	学習関連の活動は記載がない
36名	健康増進	冷水摩擦、健康診断、体操、遊戯、学習	—
30名	精神修養、健康増進	学科の学習、心理検査、学芸会、体操、散歩、水泳	—
不明	健康増進	体操、水浴、神社参拝、自然体験、写生、学習	健康児童の心身の鍛練、虚弱児童の体質改善
50名	精神衛生、健康増進	体操、学科の復習（算数、国語）	—
200名	健康増進	自由遊戯、冷水浴、図工、学科の復習、神社参拝、講話（歴史談、健康談等）、温浴	参加者は市内各小学校の尋常3年生以上。なるべく自然の中で自由に遊ばせて、健康増進を図る方針。神社の境内で実施することで、敬神崇祖の精神を養う。
37名	健康増進	不明	1909年より実施
217名	健康増進	体操、学科の復習、深呼吸、自由遊戯、講話、お伽会、体重検査	6年女子は自然自由研究を実施
157名	健康増進	運動、学習	体格薄弱、腺病質、呼吸器もしくは胸囲の異常、慢性胃腸病、栄養不良、病後衰弱のものが参加。1912年より実施
100名	健康増進	体操、学科の復習、自由遊戯、お伽会、唱歌、身体検査	—
99名	健康増進、水泳練習、学科の復習	体操、冷水摩擦、神社参拝、体操、散歩、水泳、学科の復習	虚弱児童は水泳をするのに身体上問題がない児童のみ参加を許可
46名	健康増進	冷水摩擦、深呼吸、腹式呼吸、休憩中の宿題、自然体験活動（動植物の観察など）	1916年から実施
36名	健康増進	海水浴、裸体体操、相撲、学科の復習	主に健康な児童が参加。「灼熱せる砂中と赫々たる太陽の直射とにより身体を鍛練」した。
54名	学力向上、健康増進	自然観察（動植物）、見学活動、自主学習、学芸会	特に自然観察（動植物鉱物の調査採集）、地理の学習、高原の産業の調査などに力点を置いた。
940名	精神修養、健康増進	林間：学科の復習、講話。臨海：体操、海水浴、砂浴、遊戯体操	前期（8日間）、中期（24日）、後期（19日間）で実施。中期は朝起き会で自由参加。質実剛健の気風の育成、全児童の健康増進を目指す。また、海事思想を養成できた。
95名	健康増進、生活習慣の確立	学科の復習、海水浴、運動、入浴、二見町の町勢見学	1917年より開始。指導には小学校の校長、教員があたった
63名	精神修養、健康増進	団体生活	共同生活に慣れ、社会道徳を理解し、自治の観念を育てることができた。また、公德心を養成し、克己心を練る機会にもなった。
79名			
190名			
234名	健康増進、体験学習	航海（海上生活）、講話（地理・歴史・産業）、名所旧跡の見学、お伽会	汽船に乗船し、瀬戸内海や九州地方を航海。海上生活を通じて身体を健康にし、各都市や名所旧跡を巡り知見を広める目的。
133名	健康増進	学習、海水浴、登山、学芸会、小旅行、登山、水産講習所見学	1914年より開始。場所は天橋立近郊。
97名	水泳練習、健康増進、学科の復習	水泳、学科の復習、講話、水源地の見学	健康児（体格「甲」のもの）の健康増進を目的。身体虚弱児の参加は認めなかった。毎日新聞社が協力。
不明	郷土の学習	郷土の地理・歴史・産業に関する学習・見学	1911年は第1回（人数は不明）。第2回は約140名が参加。第3回目以降から健康増進が目的に加えられ、内容も体育関連の活動が増える。
73名	学力向上、健康増進	学科の復習、自然科（自然に対する観察吟味、郷土に関する観念を育てる）、体操	1916年より実施。全国的にも注目されていた。学科の学習においては、チームティーチングを実施（全体指導と個別指導の教員を配置）。
23名	精神修養、健康増進、生活習慣の確立、自治の共同生活、親自然	水泳、体育会、学科の復習、自由研究会（理科、地理、歴史その他自由研究）、学芸会、講話会（衛生講話、郷土地理・歴史）、海藻魚介類採集標本作成、諸種の見学。	有害な社会的刺激より児童を救済し、善良の生活習慣を確立。自然の探求者、実際の知見を獲得する。医師は淀江町在住に依頼。将来的には「虚弱児童」向けのものを実施したい。

い健康児童を第二となすを穏当なる順序なりとす」と、虚弱児童の健康増進を主目的とする「林間学校」の必要性を強調している⁵⁰。この文部省の指摘からも、当時の「林間学校」が必ずしも虚弱児童の教育に限定されるものでないことが分かる。

以上のように、明治末期から大正期にかけての「林間学校」は、欧米の「林間学校」を模範としながらも、その実施の目的や方法については、まだ理解が十分でない点も多かった。しかし、この「不十分さ」や虚弱児童を養護するという目的の「不徹底さ」が、特色ある「林間学校」実践を展開するための余地を残す結果となったともいえよう。また、必ずしも虚弱児童向けのものに限られてはおらず、健康な児童を鍛練し、より強健にしようとするものや、郷土や開墾地についての体験的な学びを主とした実践、虚弱児童の養護を主目的としつつも、学習面で特徴的な活動をしている実践など、多様な目的や内容の「林間学校」実践が、一定数実施されていたのであった。次節では、これらの特徴的な実践から、京都市教育会が実施した「海上学校」と高松市新瓦町小学校の「臨地教授」を中心に検討し、その普及状況の特質を明らかにする。

3, 大正期における「林間学校」の普及状況―地域の教育活動を基盤とする林間学校―

本節では、地域の教育活動を基盤とした「林間学校」の事例として、第2節の表7の実践から、1916年に京都市教育会が実施した「海上学校」と1911年から高松市の新瓦町小学校で実施された「臨地教授」を取り上げて考察する。

はじめに、京都市教育会が実施した、「海上学校」を取り上げる。主な資料としては『海上学校記念帳』及び参加者の「募集文書」を使用する。なお、海上学校は、今日的視点から見れば、「林間学校」に分類されないかもしれないが、第1節で明らかにしたように、当時としては「保養船」⁵¹もしくは「航海式の臨海学校」として分類されていた。たとえば、亀島の『日本に於ける常設林間学校之実際』や鷗飼の『日本アルプスと林間学校』では、「林間学校」の類型の一つとして、「航海式の臨海学校」や「海上学校」「海上旅行」を紹介している⁵²。また、小田の『野外学校の学理と実際』でも「海上で即ち航海によるもの」として船による「林間学校」を示し、日本における最初の実践例として京都市教育会の「海上学校」を例示している⁵³。このことから、「海上学校」は大正期の「林間学校」として考えることができるといえる。それでは、「海上学校」はどのように実施されたのだろうか。『海上学校記念帳』によれば、期間としては、8月3日から8月9日までの7日間にわたり実施されている。7日間の日程を表にすると、表8ようになる。

表8に示したように、教員及び参加児童は、商船会社九州航路の客船である「龍田川丸」に乗船し大阪築港を出発、航路により呉軍港、別府市、高松市などを巡り、再び大阪に寄港した。宿泊や食事などはほぼ船上でおこない、目的地に着くと上陸して、軍港、史跡名所、寺社の見学や、教員によるその地域に関する講話をおこなっている。「海上学校」の目的について「募集文書」は次のように示している⁵⁴。

表 8. 海上学校の日程

日付	日 程	宿泊場所
8月3日	京都出発(午前10時)→龍田川丸乗船・大阪築港出向(午後4時)→和田岬灯台、摩耶山、六甲山、須磨、舞子、明石、淡路島	船中
8月4日	呉軍港着(午前8時)、軍艦見学、将校講話→呉出航(正午)→厳島着(午後2時)、遊覧→厳島出航(午後8時)→瀬戸内を遊覧	船中
8月5日	別府着(午前6時)→宇佐八幡宮参拝・講話、宇佐八幡・温泉地獄巡り、陸上にて宿泊	陸上
8月6日	湯元見学、海水浴→別府出航(午後6時)	船中
8月7日	多度津着(午前7時)→琴平遊覧(金毘羅神社)→多度津出航(午前11時)→小豆島着(午後2時)→寒霞渓遊覧→海水浴→小豆島出航(午後8時)	船中
8月8日	高松着(午前9時)→市内遊覧→高松出航(午後2時)→鳴門着(午後5時)→鳴門公園の見学及び観潮→鳴門出航(午後8時)。この間、源平古戦場、栗林公園、高松城址を見学。	船中
8月9日	大阪築港着(午前7時)→京都帰着(午後11時)・解散	—

注：京都市教育会『海上学校記念帖』（1916年）及び『京都教育時報』99号（1916年）をもとに作成。

山は京都に在る諸君の朝夕の友とするところのものであって、これによって崇高な精神を日頃養うことは出来ていますが、併し潮風に嘯いて雄大快活な元気を作ることは残念ながら出来難いことと思います。市教育会では、ここに感ずる所があって、本年の夏季休暇中に海上学校を開設し、海国少年の元気を振り興すと共に、四国中国九州の史蹟名所を尋ね廻って、百聞は一見に如かざる知識を養い、その心身を瀬戸内海の爽快な潮風に鍛えんことを計画しました。

このように、海上学校の目的としては、心身の健康増進の他に、体験を通じて知見を広めることが重要視されていた点が特色として挙げられる。先の表8に示したように、実際の活動内容を見ても、瀬戸内海や九州地方の史蹟や名所の見学が多数を占めており、他の健康増進型の「林間学校」のような体育・衛生関連の活動は、8月6日と7日の海水浴以外は実践されていない。ただし、先の小田によれば、「航海式の臨海学校」においては、塩分を含んだ空気を浴びることで身体が健康になると述べられており、海上生活そのものが健康増進の効果があるとされている⁵⁵。「海上学校」も同様の理由により、身体健康増進を目指す活動を特に実施しなかったのだと考えられる。

また、「募集文書」によれば、参加児童は尋常小学校五年以上の男女250名で、この他、付添い及び中学校生徒の参加を50名まで認めるとしていた。費用については、尋常小学校児童が6円80銭、高等小学校児童が7円50銭、付添いの大人及び中学生が10円と、かなり高額であったことが分かる。規定上には、身体状況に関する内容が含まれていないこと、また虚弱児童の多くは貧困層の家庭のものが多かったこと、さらに、その教育目的や活動内容に虚弱児童向けのものである意図が明確に見られないことから考えると、「海上学校」は健康な児童を対象としていたといえる。

それでは、他の「林間学校」実践が身体健康増進を重視したのに対し、なぜ「海上学校」では

心身の健康に加え、学習上の効果を強く意識していたのだろうか。一つには、先に述べた海上生活そのものの健康増進上の効果があったと考えられる。また、もう一つの理由としては、「海上学校」に前身とする活動があったことが挙げられる。京都市教育会では、1915年に「林間学校」を実施しており、その発展的活動として「海上学校」を企画したという⁵⁶。ただし、堀田穰によれば、「海上学校」より以前に、社会教育としてお伽芝居を演じていた京都お伽倶楽部及び大阪お伽倶楽部により、「お伽船」という船舶を利用した活動が実践されていた⁵⁷。この「お伽船」では、「海上学校」と同じく、瀬戸内海や別府、高松市を航海により巡り、芝居や講話による教育をおこなっていた⁵⁸。さらに、それより以前の1909年には、京都お伽倶楽部の高尾亮雄が、兵庫県の高砂にて同倶楽部の子どもを連れて「海浜学校」をおこなっており、この活動がさらに拡大され「お伽船」に発展したのであった⁵⁹。京都市教育会による「海上学校」は、この「お伽船」に関係していた京都府会議員の鈴木吉之助や、京都市会議員であり口演童話家として活動していた久留島武彦らにより企画・実践されている⁶⁰。また、久留島は、1911年より「お伽周遊列車」という列車を利用して名所や史蹟を巡り、学習活動や芝居をする同様の計画を実施していた⁶¹。京都市教育会の「海上学校」は、その趣旨や内容が「お伽船」「お伽周遊列車」と類似していることから、これら京都お伽倶楽部の活動を基盤に、京都市教育会を主催者とする「林間学校」として実施されたのだと考えられる。つまり、「海上学校」には、「お伽船」という「林間学校」の基盤となる地域の教育活動があり、このために健康増進に加えて、体験を通じて知見を広めることを重視した、特色的な実践内容となったといえる。

なお、京都市教育会により実践されたのは、1916年の1度のみであり、翌年からは再び京都お伽倶楽部及び大阪お伽倶楽部が「お伽船」や「海上学校」の名称でこれを実施し、以降は定期的に開催されるようになったという⁶²。また、京都市教育会においては、1919年には三重県津市で「海浜学校」を開催し、1920年からは京都市内下鴨で「下鴨林間学校」を開催するなど、欧米型の「虚弱児童の養護」を中心とする「林間学校」を実施するようになっている⁶³。

また、もともとその地域で実践されていた教育活動を基盤に「林間学校」を実施する事例は、高松市の新瓦町小学校の「臨地教授」でも確認できた。この高松市の具体的な内容については、別稿にて詳細を明らかにしているので、ここではその要点を示す⁶⁴。新瓦町小学校は、当時の高松市の中心地である新瓦町に位置する小学校であった。新瓦町小学校では、1910年から「臨地教授」という名称の野外での教育活動を実施している。『香川新報』によれば、新瓦町小学校の実践には、毎年香川県内は勿論、近隣諸県や東京府からも参観人があった。特に、1915年の第5回の際には、帝大の石原喜久太郎や奈良県の視学らが「臨地教授」を視察している⁶⁵。これらのことから、同校の「臨地教授」が注目度の高い実践であったことが分かる。

新瓦町小学校の、第1回・2回「臨地教授」における中心的な活動を見ると、郷土を題材とする歴史もしくは地理の実地研究が多数を占めていた⁶⁶。また、開催地の牟礼村では醤油の生産が行われていたため、醤油醸造場の見学や醤油の製造に関する講話も実施されていた。その他、地元の俳

人である久保不如帰邸にて歴史的な武器や防具の見学も行われた。一方で、健康増進に関する内容はほとんど予定されておらず、唯一予定表に記載されていた水泳も実際にはおこなわれなかった。このように、初期の新瓦町小学校の「臨地教授」は、郷土史・地理中心の実地研究としての性格が強く、「林間学校」というよりも、修学旅行に近い内容であった。

一方で、第3回以降になると、その活動内容や形態に徐々に変化が現れてくる。第3回以降の特質としては、体育関連の活動が充実しており、夜間の遠足や水泳が実施されるようになるなど、体育面での効果が強調されるようになったことが挙げられる⁶⁷。さらに、最終日には「身体検査」が実施され、「臨地教授」が児童の身体的成長に及ぼした効果が数値によって示されている。この背景としては、1912年より高松市で「夏期林間保養所」が開設され、欧米流の健康増進型の「林間学校」が開始されたことが挙げられる。市内の各小学校が連合して実施したため、新瓦町小学校の教員も、「夏期林間保養所」に関わっており、この「林間保養所」の影響を受ける形で、「臨地教授」にも健康増進に関する目的や内容が受容されたと考えられる。すなわち、新瓦町小学校の「臨地教授」でも、その地域で既に実践されている同種の活動に、欧米型の「林間学校」の趣旨や活動内容を取り入れる形で発展がなされたのである。

また、先の表7にもあるように、主な目的としては、身体健康増進にあるが、活動内容として史跡や名所、産業の見学をおこなう実践も多数あった。「林間学校」は各地域の寺社仏閣や史蹟、公園で開催されるものが多かったため、その地域ならではの環境が教育に活用されることにも繋がったといえる。

文部省学校衛生課による雑誌記事においても、日本の「林間学校」は、欧米の実践に比して「教育的指導のより濃厚に加はっているのが頗る興味のある点」と指摘⁶⁸しているように、虚弱児童の養護・健康増進のみならず、教育的な工夫がなされていた点が国内の「林間学校」の特色であった。

その理由として、先行研究では、「林間学校」の参加者が、費用の関係上、新中間層の家庭により占められており、彼らの教育要求を受ける形で、より教育的な意義が強調されるようになったとしている⁶⁹。確かに、新中間層の家庭や彼らの多くが通学した私立学校の実践が、大正後期の日本における「林間学校」の独自性に寄与した影響については、筆者も同意するところである。一方で、本論文で明らかにしたように、明治末期から大正中期にかけて、まだ私学の実践が少なく、また参加者の社会階層が混在していた時期にも、一定の独自性をもつ「林間学校」が実践されていた。本論文で取り上げた、京都市教育会や高松市新瓦町小学校の事例のように、「お伽船」や「臨地教授」など、もともと地域で実施されていた教育活動に、欧米の野外での教育の要素が結びつく形で「林間学校」がおこなわれているものもあった。第1節でみたように、ヴァルトシューレやフェリエンコロニーなどの野外での教育実践は、野外や屋外の環境を利用するという点では共通していたが、その形態や実施内容は様々であり、その分、地域ならではの教育実践と結びつけやすかったといえる。

以上のように、大正期の「林間学校」の普及状況としては、欧米のヴァルトシューレやフェリエ

ンコロニーをモデルとする虚弱児童の健康増進を主目的とする実践が多数を占めていた。一方で、その地域で展開されていた既存の教育活動を基盤とし、独自の目的を掲げる実践も一定程度展開されていたのであった。また、健康増進に主眼を置き虚弱児童の養護を目的とする実践においても、寺社仏閣、史跡名勝、産業、文化の見学など、地域性を生かした活動が実施されていた。このように、大正中期には、体験的な学習を主目的とする、いわば現代の林間学校・臨海学校にも通じるような、特色ある「林間学校」が、大正末期から昭和初期にかけて発展するための条件が整いつつあったことが指摘できるのである。

おわりに

本論文は、大正期における「林間学校」の受容と発展の状況について、その目的と実践内容の分析を通じて明らかにするものであった。本論文の要点を示すと以下になる。

第1節でみたように、明治末期から大正期にかけては、ドイツを中心とする欧米の「林間学校」が紹介され、国内でもこれらを模範とする実践が試みられた時期であった。欧米の実践は虚弱児童対策としての性格が強く、同様の課題を抱えていた日本でも、虚弱児童の養護に有効な実践として「林間学校」が普及していく。このため、栄養管理と衛生指導を通じた健康増進、「身体測定」による成果の確認など、その活動目的や内容が全国的に画一化されることにもつながっていったのである。

一方、第2節で検討したように、明治末期から大正期においても、健康な児童をより強健にするための鍛練的な実践や、体験を通じた学びを主目的とする実践、虚弱児童の養護を主目的としつつも、学習面で特徴的な活動をしている実践など、特色ある教育目的や内容による「林間学校」が一定程度展開されていた。また、第3節で考察したように、京都市教育会の「海上学校」や高松市新瓦町小学校の「臨地教授」など、従来、地域で実践されていた教育活動に、「林間学校」の目的や内容を結びつけて実施し、特色ある実践が展開された事例も確認できた。このように、明治末期から大正中期にかけても、体験的な学びを重視する独自の「林間学校」がおこなわれるなど、大正末期から昭和初期以降に学習を主目的とする「林間学校」が発展するための条件が、一定程度整えられつつあったといえる。

その理由としては、この時期に紹介された欧米の「林間学校」は、野外や屋外の環境を利用するという点では共通していたが、その形態、実施内容は様々であったため、すでに地域で実践されていた類似の教育活動と結合させやすかったことが挙げられる。つまり、学校教育や社会教育などにおいて、「林間学校」に類する地域ならではの野外・校外活動が実施されていた場合、これらの活動に「林間学校」の目的や内容を受容しつつ、普及と発展がなされた事例が少なからず存在していたと考えられるのである。

以上のように、大正期の「林間学校」は、単なる欧米の実践の模倣には留まらず、実践の基盤となった活動の有無や、基盤となる活動の性格に応じて、独自の目的が付与されたり、地域色の強い

活動内容が配されていたりしたといえる。そして、大正期において、このような形で「林間学校」の受容と発展がなされたことが、昭和期における学習活動を重視した「林間学校」の発展に繋がっていくのであった。

今後の課題としては、地域性を基盤とする同様の実践をさらに発掘し、大正期以降の「林間学校」の受容と発展の過程を、より実践に密着しながら明確にする必要がある。また、発展的な課題としては、本論文で明らかにした「林間学校」の受容と発展の歴史の中に、個別の「林間学校」実践をどのように位置づけることができるのか、個々の実践の意義を明確にしつつ、大正期の「林間学校」の総体的な特質を究明することが重要である。

[注]

- 1 山田誠「初期の夏期林間学校の性格について」『神戸大論叢』第27巻4号、1976年、105-124頁。
- 2 渡辺貴裕「＜林間学校＞の誕生―衛生的意義から教育意義へ―」『京都大学大学院 教育学研究科紀要』第51号、2005年、343-356頁。
- 3 桐山直人『茅ヶ崎の小さな学校：旧白十字会林間学校の三二年』草土文化、1992年。
- 4 この他の研究として、長谷川千恵美「身体虚弱児教育形成史の研究―Open-air School・Classの受容過程を中心に―」『研究紀要』43号、日本大学人文科学研究所、1992年、129-142頁、がある。
- 5 以下、特に注記をしない場合、本論文における「林間学校」という用語は3種の総称として使用する。
- 6 文部大臣官房学校衛生課「夏期に於ける児童の田園滞在に就て」『教育時論』1413号、開発社、1924年、23頁。
- 7 杉浦守邦「フェリエンコロニー」茂木俊彦ほか編『障害児教育大事典』旬報社、1997年、707-708頁。
- 8 瀬川昌耆『学校衛生法綱要』發兌書林、1893年、77-78頁。
- 9 坪井次郎『学校衛生書』1899年、金港堂、150頁。
- 10 小原頼之『育児日記親ごころ』文陽堂、1908年、282-296頁。
- 11 駿河尚庸『最新学校衛生学』吐鳳堂、1910年、316頁。
- 12 市街地の近郊に設置された通学制の「林間学校」で、児童に牛乳を与え栄養補給をおこなったもの。
- 13 吉田熊次『社会教育』敬文館、1913年、123-148頁。
- 14 文部省普通学務局『夏季休暇中ノ体育的施設ニ関スル意見』1918年。なお、本報告書は、文部省学校衛生官であった北豊吉が、1917年に各地の「海濱聚落」「水泳」「林間聚落」「山間聚落」「温泉地聚落」等について調査をおこなった結果をまとめたものであり、その概要、実施方法、注意点などが記されている。
- 15 たとえば湯原元一『都市教育論』金港堂書籍、1913年、池上弘『児童個別的取扱の実際研究』弘文堂書店、1913年、栗本東明『肺病全快の秘訣』新文館、1918年、関寛之『晩近の児童研究』洛陽堂、1919年、石原喜久太郎『石原学校衛生』吐鳳堂書店、1920年、三田谷啓『教授衛生』同文館、1920年、小田俊三『野外学校の学理と実際』弘道館、1922年、竜山義亮『教育制度の新潮』教育研究会、1922年、鵜飼盈治『日本アルプスと林間学校』同文館、1923年、などが挙げられる。
- 16 大正期の日本では、「ワルドシュレー」の名称で呼ばれた。
- 17 1791年にイギリスのマーゲートに開設された“Royal Sea Bathing Hospital”のことと考えられる。
- 18 小田、前掲書、13頁。
- 19 同上、18頁。
- 20 関、前掲書、307-308頁。
- 21 三田谷、前掲書、325-326頁。
- 22 関、前掲書、307-308頁。鵜飼、前掲書、40頁。
- 23 関、同上、307-308頁
- 24 鵜飼、前掲書、43頁。

- 25 同上書, 43 頁。
- 26 関, 前掲書, 307-308 頁。
- 27 三田谷, 前掲書, 318 頁。
- 28 竜山, 前掲書, 432 頁。
- 29 関, 前掲書, 307-308 頁
- 30 鶴飼, 前掲書, 56 頁。小田, 前掲書, 13 頁。
- 31 鶴飼, 同上書, 59 頁
- 32 小田, 前掲書, 18 頁。
- 33 鶴飼, 前掲書, 60 頁
- 34 小田, 前掲書, 22 頁。なお, 同様の分類は鶴飼の『日本アルプスと林間学校』, 木村泉, 高橋与惣『理論実際学校の夏季聚落』大同館書店, 1927 年などにも記載がある。
- 35 小原頼之「児童の楽園(一)」東京朝日新聞(朝刊), 1907 年 12 月 7 日, 6 面。「転地休養会の発足」東京朝日新聞(朝刊), 1907 年 12 月 25 日, 6 面。「転地休養会を観る」東京朝日新聞(朝刊), 1907 年 12 月 31 日, 6 面。「転地休養報告会」東京朝日新聞(朝刊), 1908 年 2 月 9 日, 4 面など。
- 36 亀島晟, 石原正明『日本に於ける常設林間学校之実際』新教社, 1923 年, 108 頁。
- 37 小田, 前掲書, 20 頁。
- 38 全国病弱虚弱教育研究連盟『日本病弱教育史』1990 年, 548 頁。岡田道一『林間学校』内外出版, 1930 年, 7 頁。
- 39 文部大臣官房学校衛生課『大正七, 八, 九, 三箇年に於ける全国夏季体育的施設』1922 年。本報告書には, 1918 年から 1920 年にかけて, 国内で夏期休暇中におこなわれた体育関連の活動について, その数量や実践内容がまとめられている。
- 40 文部大臣官房学校衛生課『夏季に於ける体育的施設の状況調査』1926 年。本書は, 1918 年から 1923 年の間に各地方長官から文部省に報告があった「夏季体育的施設」について, 全国の実践状況や内容を報告したものとなっている。
- 41 なお, 本書と報告書では, 1918 年から 1920 年までの実施箇所数に若干の相違がある。この相違は, 報告書では, 「温泉聚落」「高山聚落」などが含まれていなかったためと考えられる。
- 42 「林間学校奨励補助二関スル件」『議員回付建議書類原義(四)』(国立公文書館蔵: 本館-2A-029-00・請願 00046100)
- 43 岡田, 前掲書, 7 頁。
- 44 同上書, 55 頁。
- 45 たとえば, 大正期の大阪市周辺域では, 阪神電鉄・阪急電鉄を中心とする私鉄による観光地や郊外住宅地の開発が急速に進展している。特に, 阪神鉄道では, 本格的な住宅経営にさきがけて, 医療関係者の講演をまとめた『市外居住』のすすめという小冊子を発行し, 郊外生活がいかに健康に適しているかを強調していた。また, 同社は雑誌『郊外生活』(1914 年～1915 年)を刊行し, 都市生活の健康への悪影響を訴え, 郊外生活の健全さを喧伝するなどの「啓蒙」活動も展開している(角野幸博「甲子園/西宮 大衆化する健康・娯楽地のイメージ」片木篤, 藤谷陽悦, 角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会, 2000 年, 384 頁)。
- 46 『大正七, 八, 九, 三箇年に於ける全国夏季体育的施設』, 12-14 頁。これらの地域で「林間学校」が少ない理由については, さらなる分析が必要なため, 別稿を用意したい。
- 47 『夏季に於ける体育的施設の状況調査』, 7 頁。
- 48 この点については, 個別事例の検討など, さらなる分析が必要なため別稿にて明らかにする。
- 49 鶴飼, 前掲書, 110 頁。
- 50 『大正七, 八, 九, 三箇年に於ける全国夏季体育的施設』, 24-25 頁。
- 51 当時の学校衛生技師の木村泉の『理論実際学校の夏季聚落』でも, 「林間学校」の類型として, 「保養船」を紹介している。同書によれば, 保養船はアメリカのニューヨークにある結核病院で始まったとされる(木村泉, 高橋与惣, 前掲書, 61 頁)。
- 52 亀島, 前掲書, 106 頁。鶴飼, 前掲書, 151-152 頁
- 53 小田, 前掲書, 64 頁。
- 54 京都市教育会「海上学校募集文書」1915 年。(筆者所蔵)
- 55 小田, 前掲書, 62 頁。

- 56 京都市教育会「本会会報」『京都教育時報』第96号, 1916年, 18頁。
- 57 堀田穰「油屋熊八・梅田凡平・お伽船」『別府史談』別府史談会, 2006年, 2頁。
- 58 倉澤栄吉監修, 後藤惣一著『久留島武彦』大分県教育委員会, 2004年, 108-109頁。高尾亮雄著, 堀田穰編『大阪お伽芝居事始め』関西児童文化史研究会, 1991年, 51頁。
- 59 高尾, 同上書, 51頁。
- 60 京都市教育会『海上学校記念帖』1916年, 1頁。(筆者所蔵)。
- 61 倉澤, 前掲書, 107-108頁。
- 62 堀田, 前掲論文, 1頁。なお, お伽船は, 「海上学校」以降, 1940年まで30年にわたり開催された。
- 63 京都市社会課『林間学校の話』1922年, 13-14頁及び16-17頁。
- 64 拙稿「大正期の地方都市における林間学校受容に関する一考察: 大阪府と香川県の事例を対象に」『論叢: 玉川大学教育学部紀要』2010年, 91-110頁。
- 65 「学校衛生視察」『香川新報』1915年8月25日, 2面。
- 66 「臨地教授児童新聞」『香川新報』1911年8月26日, 2面。
- 67 「新瓦町校 臨地教授」『香川新報』1913年8月24日, 3面。
- 68 文部省学校衛生課「夏季に於ける児童の田園滞在に就いて」『学校衛生』第5巻8号, 1925年, 47頁。
- 69 渡辺, 前掲論文, 354頁。